

特別の教科「道徳」の授業の質を高める教育実践 ～「二中方式」による道徳授業の実践を通して～

宮城県富谷市立富谷第二中学校
校長 佐藤 秀二

1 はじめに

本校は富谷市に位置する比較的生徒数の多い学校である。明朗闊達な生徒が多く、学校生活においては生徒会活動をはじめ学習にも意欲的に取り組んでいる。一方で、自分の考えや思いを、相手に分かりやすく、伝わるように話したり、相手の気持ちや立場になって思考を巡らせたりするなど、他者とのかかわり合いという点における課題を解決すべく、以前から道徳の時間に力を入れてきている。

本校ではICTの活用推進を図っており、比較的早い段階で市内小中学校での生徒用タブレットの使用を開始している。コロナによる臨時休業措置をとった際も、タブレットを家庭に持ち帰らせ、リモートによる授業を行ったり、eラーニングの活用を図ったりしてきた。生徒はタブレットの扱いに慣れており、ほとんどすべての授業で使用している。

学習指導要領の全面実施2年目であるが、特別の教科「道徳」の授業にもICTを活用しながら、3年目となる「二中方式」の道徳の取り組みにおける成果と課題について明らかにしていく。

2 「二中方式」の道徳

本校では以前から、学年所属の担当者が交代で道徳を行ってきている。理由は次のとおりである。

ア 生徒の考えや思いを素直に引き出すため

イ 生徒の変容を学年担当全員で検討するため

ア、イともに学年担当全員で生徒の成長を育むという思いが背景にあり、そのためには教科の授業のみならず、道徳の授業にも学年担当全員でかかわり、生徒の発達段階に即した変容をていねいに見ることが大切であると考えてきたからである。

このことを踏まえ、3年前からは「二中方式」と称する次の三本柱で道徳を実践している。

① 学年全員でのローテーション授業

② ICTの活用

③ 学び合い活動 以下、解説する。

① 学年全員でのローテーション授業について

数年前から実施しているローテーション授業をそのまま取り入れた。担当する教師も生徒も従来の方式であるので、違和感はなかった。簡単に図式にすると次の

ようになる。

【図1】(4学級の学年の場合)(第1週)

1組学級	2組学級	3組学級	4組学級
↓	↓	↓	↓
1組担任	2組担任	3組担任	4組担任

【図2】 ↓ (第2週)

1組学級	2組学級	3組学級	4組学級
↓	↓	↓	↓
学年主任	1組担任	2組担任	3組担任

【図3】 ↓ (第3週)

1組学級	2組学級	3組学級	4組学級
↓	↓	↓	↓
副主任	学年主任	1組担任	2組担任

学年の編成は、学年主任、副主任、学級担任である。4学級の場合は6名の担当教師となる。出張等の場合は4年部と称する学年所属が補助にはいることもある。

【図1】の場合は学年主任と副主任が授業見学を行う。

【図3】の場合は3組担任と4組担任が授業見学を行う。授業見学の視点は次の3つを中心に行う。

A 担任学級の生徒の反応

B 授業者の生徒へのかかわり方

C 発問のタイミングや切り返し等

Aは、授業者によって生徒がどのような反応を示すかを観察する意図がある。これにより、授業後には担任と授業者間で、生徒について観察者側からみた意見と授業者側の意見とを共有することができる。

BとCは、授業の指導技術面における、どちらかといえば教師が授業者から学ぶ意図が大きい。特に、初任層や10年未満の若手教員の場合、道徳の授業について学ぶ機会は自教科の研修に比べてそれほど多くはない。しかし、この方式であれば、6週の間4回は自身の道徳について授業後に学年主任や他学級の担任から指導を受け、意見を交わすことができるうえに、ベテラン層の授業を、自分の学級の生徒をモデルに間近で見ることができるほか、発問の仕方や問の取り方、生徒の意見の取り上げ方や切り返し、二分法などの資料の扱い方などといった、指導技術の側面を実際の場面で学ぶことができる貴重な研修の場となっている。同時に

担任をもたない主任や副主任にとっても、教科授業以外の生徒の横顔を知る貴重な機会となっており、それらは普段の学校生活における生徒理解の側面にも有効となっている。

② ICTの活用について

富谷市は早くから生徒一人一台ずつキーボード付きのタブレット型端末 (iPad) (※以下「タブレット」) を全生徒へ貸与し、授業等で活用している。タブレットの使用については取り扱いの約束事を保護者にも周知し、正しく使用している。生徒は登校すると充電している専用ロッカーから自分用のタブレットを取り出し準備する。授業ではもちろんのこと、教科や部活動、学年や学校からの連絡等の周知、リモート集会等でも自在に活用できるようにしている。タブレットには「ロイロノート」と呼ばれるシステムを導入し、授業中に自分の考えや感想等を入力、教師用端末に電送、すぐに大型モニターに映し出すことができる。

道徳の授業では主に次の場面で活用を図っている。

- 1) 画像や映像、読み物資料などの教材の提示
- 2) 自分の考えの入力
- 3) 他者の考えを知る
- 4) 授業前後のアンケート等の結果表示
- 5) 話し合った内容の表示
- 6) 生徒の意見や考えの集約と表示 (文字化)
- 7) 生徒の意見の紹介 (すべて・一部)

1) についての利点は、職員室ですべて準備ができる点である。職員のパソコンからすぐに取り入れ、必要な



【図1 資料の提示】

部分だけを編集できる利点がある。読み物資料等も分割で示す場合、教師用のタブレットから授業中に送信し同時に読ませることができる。

2) については、人前で自分の考えを述べたりすることを得意としない生徒でも表現できる利点がある。



【図2 考えの入力】

自分の考えを文字として言語化し残すことにより、あとで自分の意見を発表する際の手がかりや根拠として示すことができる。

3) については、モニターに表示した全員の考えをそれぞれピックアップし、自分の考えと比較することが容易となっている。【図7 参照】

4) については、タブレット内のソフトウェアを活用することで、授業



【図3 教師用タブレットでアンケートの集約表示】

開始直後でも終了間際でも瞬時にアンケートを取ることができるほか、授業前と授業後の意識の変容も見ることができる。

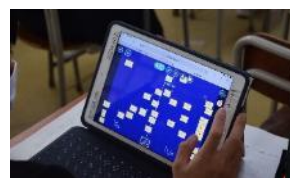
5) 及び6), 7) については、後述にもあるが、富谷市で実践している「学び合い学習」を道徳の時間にも導入し、小グループ



【図4 小グループ発表】

での意見交換の際、簡潔に表示しながら考えを発表している。【図4参照】

また、【図5】のように個人の考えをその都度リアルタイムに一人一人のタブレットにも表示し、自分の考えやグループでの考えと比較することを容易にしている。



【図5 意見の表示】

③ 学び合い活動について

富谷市では教科等の授業において、学力の定着を図る手立



【図6 グループ活動】

てとして「学び合い学習」の手法を長期にわたり実践している。生徒は小学校よりこの「学び合い学習」を継続している。

道徳の時間には、一人一人の意見を述べ、教師が意見を束ねるだけではなく、小グループで互いの考えを述べたり議論したりする活動を通して、道徳的価値に向き合い、特に「自分がその立場なら」、「自分がこの人だったならば」の視点で意見を交わし、さらに他のグループの意見を聞きあうことで多面的・多角的に道徳の内

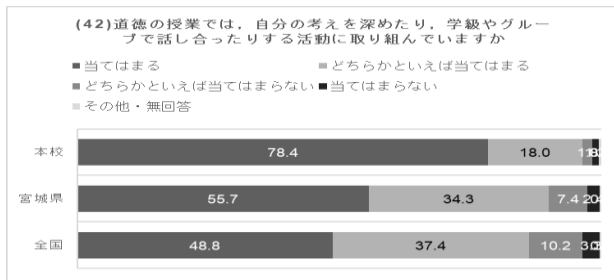
容項目の価値をとらえさせたい場面において適宜実施している。【図6参照】



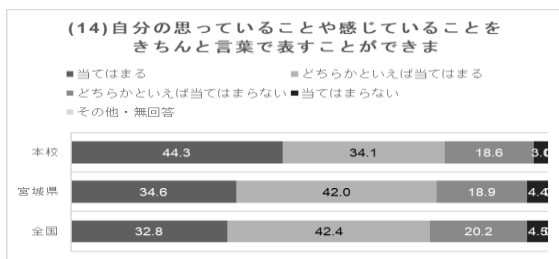
【図7 4人グループ、全員
の意見をタブレットで見る】

小グループは4人で編成している。この人数は教科等の授業においても同じである。一般的には生活班と称する5～6名のグループであるが、授業場面においては役割分担として、進行役・記録役（タブレット入力）・発表役・意見のまとめ役とし、この担当もその都度割り当てを変えている。どの生徒にも言語能力を高めさせたい意図がある。【図7参照】

3 成果と課題
(1) 成果
①「学び合い活動」の道徳授業への導入
次のグラフは令和3年度全国学力・学習状況調査における、道徳にかかわる調査結果（抜粋）である。



教科等における「学び合い学習」の定着が図られてきていることにより、道徳の授業においても学級やグループで話し合ったりする活動に取り組む割合は、「当てはまる」だけをみても全国、本県と比較してみると突出していることがわかる。



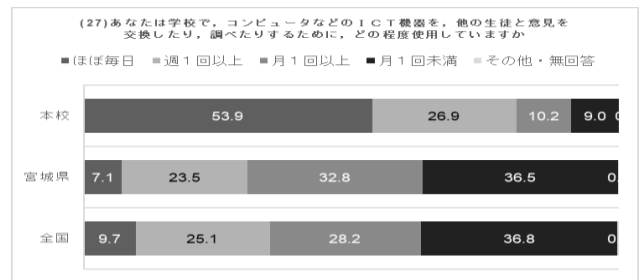
また、自分の思いや考えを言語化することについても、全国、本県と比較し「当てはまる」割合が高くなっている。

学校生活を含む生徒の日常において、人格の形成や社会の仕組みなどについての学びには、周囲とのかか

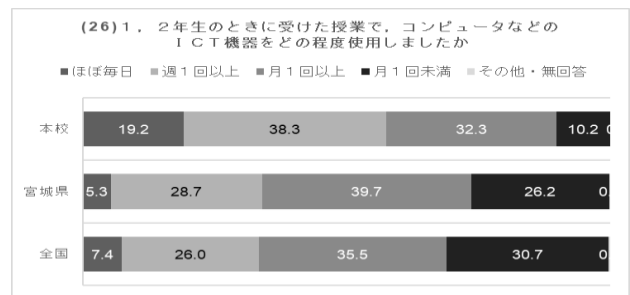
わりが非常に重要である。前述したように、本校生徒は他者とのかかわりや相手の立場に立った見方や考え方に課題がある。学び合い学習を道徳の時間に導入し、個人の考え、グループ討議、学級全体での議論を繰り返すことで、調査結果のように生徒の意識が変容してきたことは成果の一つと言える。

②ICTの道徳授業への活用

こちらのグラフも同じ調査結果（抜粋）である。

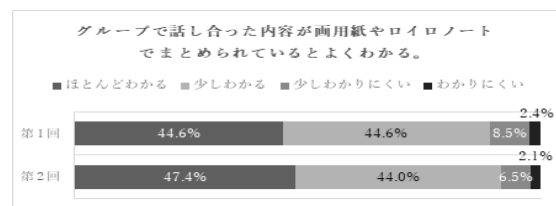


学校でのタブレットの活用は登校から下校まで、授業を中心に行事や諸活動でも行っており、正しく使用する約束を生徒も順守しているため、毎日のように使用しているという結果が半数以上を占めている。



令和元年度、2年度はタブレットの導入が開始された時期であり、全校生徒分がそろわなかったことに加え、正しい使い方を周知させ、保護者と使用に係る約束ごとの共有化を図ることに時間が必要であったため、(27)のグラフより少ない結果となっているがそれでも全国、本県と比べ突出していることがわかる。

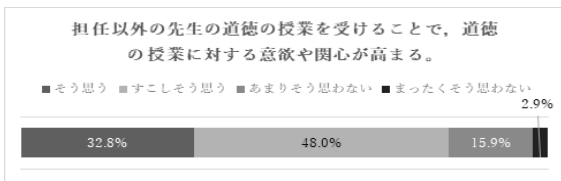
また、これとは別に校内調査では次のような結果が示された。(令和3年度前期初・後期末調査結果)



話し言葉だけではなく、文字化することやICTを活用することでお互いに理解しやすくなっていることがわかる。

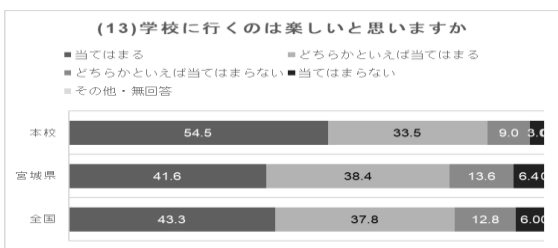
③ローテーション授業の実践について

授業者が代わることについての結果は以下のとおりである。(令和3年度末校内調査結果)



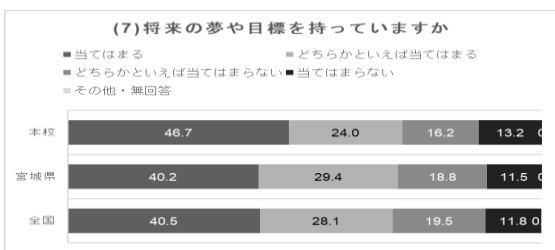
担任以外の道徳の授業を受けることは、生徒にとって新鮮で授業に対する意欲や関心を高めることにつながっている他、複数の教師からの様々なアプローチによって、多角的・多面的なものの見方や考え方ができると感じている生徒が多い。指導側にとっても相互の研修に直結することに加え、道徳の評価における偏向が出にくいことも成果と言える。

そしてこれら①～③の成果のまとめとして、次の結果が挙げられる。(令3全国学テ実態調査より)



(2) 課題

① 目標や目的を持った生活について



昨年度の全国学テの調査結果である。当てはまる等の割合は全国、本県より高いが、一方で当てはまらない割合は全国や県と同じである。周囲とのかかわりの大切さを学び取り、自他の尊重における価値観の共有は少しずつ構築されてきてはいるものの、学習における学力の向上、進路の実現、諸活動における成果の出し方といった、実生活における自己実現については成果に挙げた各点との整合性が見いだせていない状況にあると考えている。同様の校内調査でも、「ほめてもらったり認められたりした」とする数値が低くなっていた。承認欲求は誰にでも存在するが、生徒を見ると成功体験における承認の度合いが多い。人は失敗から学ぶことのほうがその強度が増す。いかにして成功体験以外からの学びや道徳的価値について学べる機会を多くする

かが大切なものとなってくる。

② 手段と目的の一致について

ICT 活用の結果とメリットは成果に示したとおりであるが、ICT 活用はあくまでも手段であり目的ではない。今後は今まで以上に ICT の活用は進んでいく時代となる。指導者側も学習者側も取り違えることなく道徳的価値項目を押さえた授業の展開や発問の吟味など、授業推進の手立てについて研修を積む必要がある。

③ 学びの蓄積と評価について

道徳ノートへの記載や道徳ファイルへの保存、そしてそれを活用した評価を行っているが、学習者も指導者も多忙な学校生活となっている。指導者においては自教科の評価等もある。今後はタブレットへの記録と送信、指導者の保存と評価への活用を図り、いわゆる働き方改革にもつながるようにしていく必要がある。

4 むすびに

「二中方式」を取り入れて3年目の昨年度、コロナで制限はあったものの、授業研究会を開催し、市内の小中学校をはじめ近隣の学校にも見てもらう機会を得た。本校では当たり前に行っている光景は新鮮なものにとらえてもらうことができた。一方で、指導者側の負担感や ICT 活用の形骸化への懸念、自校化への不安感などが指摘された。

本校での実践は今年度で4年目となる。これまでの実践過程においても、学年や教科ごとの会議等で修正点が示され、改善を繰り返してきている。その指摘において、発達段階における題材の選定が大きな分岐点になると考えている。読み物資料だけではなく、過去に制作された、みやぎの先人集の取り扱い、生活居住区に大きな影響を与えた人物や生徒の発達段階、とりわけ心情面に即した題材の取り扱いについて、深く吟味する必要がある。

コロナが世界に蔓延し早4年目となった。コロナ以前には生徒は互いに肩を組み、ときに励ましあい、ときに激論を交わしあい、お互いの気持ちを交流させながら成長してきた。今は物理的な接近すらも気を遣う状況である。そうした時期だからこそ、道徳の授業を通じて互いの立場や心情を理解し合い、よりよい学校生活を送れる基盤を培っていくことが求められている。

〈参考文献〉

中学校学習指導要領 特別の教科 道徳編 (平成29年7月 文部科学省)
生徒指導提要 (平成22年3月 文部科学省)